巻 頭 言

看護学科教員の研究や、実践の成果を蓄積し発信していく基地としての学術雑誌が必要であるという主旨のもと、滋賀医科大学看護学ジャーナルが2003年に創刊され、本年度で第7巻の刊行を迎えることとなりました。その間、学科内で本ジャーナルのあり方について種々の議論が交わされてきました。例えば、レベルアップした看護学学術雑誌を目指すのか、若しくは、研究者を育てるという観点から若手研究者の投稿論文を積極的に採択掲載していくのか等でした。今後、看護学科として、ジャーナルの「あり方」をどのようにしていくのか議論を重ね、一層充実したものにすることが編集委員会の課題であり責務であると考えています。今年度は、第1巻が刊行された主旨とは多少異なっていますが、若手研究者の投稿を積極的に採用していくという学科内の合意を得て、ジャーナルの編集を行うこととなりました。また、昨年度まで課題となっていました次のことを改善し、今後の編集プロセスに生かすことといましました。

従前からの問題点は、査読システム「査読結果への対応についての投稿者コメント」が義務づけられていないことでした。査読結果に対して投稿者がどう判断し修正したのか、あるいは修正しなかったのかが不明確でした。そのため、最終的に、編集委員会が採択可否を決定する判断に困るというものでした。査読者には査読ガイドラインに沿って、本ジャーナルに掲載する論文に相応しいかどうかのクリティークと、投稿者への査読コメントを依頼しています。その査読の指摘に対して投稿者の考えを論理的に述べ、やりとりを繰り返すというプロセスは、より価値の高い論文掲載に向けての投稿者の責任であると考えます。勿論、編集委員会としても査読の査読、つまり査読者の評価をどうクリティークしていくかが課題であり、そのことがジャーナルの質に大きく影響してきます。したがって今年度から「査読結果への対応についての投稿者コメント」を義務づけることといたしました。

このほかに新たなこととして、滋賀医科大学研究者の研究成果を登録することにより、世界の研究者や一般ユーザーの誰もが滋賀医科大学機関リポジトリーにアクセスし、論文を読むことが可能となるシステムが開始されました。それに伴い、本巻ジャーナルから論文をリポジトリーに登録し、広く研究者や他の方々に提供できることになりました。しかし、著作権の問題で昨年度までの論文は、タイトルと要旨のみを登録することになりました。

本ジャーナルが刊行された当初の目的を再確認した際、編集委員会としてジャーナルの目的をどこに設定し、そのためにどのような論文投稿を期待し、採択するかを明確にしていく必要があると考えます。今後、本ジャーナルは、当大学が掲げている「世界に情報を発信する研究者を養成する」という理念に向けて将来益々発展していくことを期待しています。

最後になりましたが、本ジャーナル第3巻から5巻まで編集委員長として、その刊行にご尽力頂きました今本教授は本年度退職されることとなりました。長年のご努力に対しまして厚く感謝を申し上げます。

平成21年2月

滋賀医科大学看護学ジャーナル
編集委員長　畑下　博世